

自分の意思で動かせる唯一の器官、それが“運動器”といわれています。その運動器に疾患が生じたとき、思い通りに動かせない身体を抱えた患者に、私たちは何ができるでしょうか。動くことは人が生きている限り 24 時間 365 日、休まず必要になる機能です。また、運動器疾患は完治する疾患もあれば、障害が残る、ひいては死に至る疾患もあります。一つの疾患が QOL に大きく影響するといえます。こうした運動器疾患とその看護を皆さんにわかりやすく伝えるために、多くの方のご意見や看護師国家試験の動向なども踏まえて、本書が完成しました。

本書のコンセプトとしては、“見てわかる運動器”を目指しました。自分の意思で動かせる器官ではありますが、理解が難しい部分がある骨、筋肉、関節、神経の構造や動きを図やイラストを用いて表現しました。時には、あえて簡素化したイラストにすることで、より私たちの動きや構造がイメージあるいは理解しやすくなるよう工夫しています。このイラストを見た上で読み進めていただくと、より理解が進むと考えています。さらに本書は、医師と看護師が協働で執筆しています。それにより、疾患の原因・検査・治療・予後のみならず、発症から退院後まで治療状況に応じた心身の変化とその看護まで、根拠をもった理解につながると考えています。

今回の第 2 版の改訂では、看護師国家試験出題基準の見直しなど適宜更新し、看護学教育モデル・コア・カリキュラム（令和 6 年度改訂版）を踏まえた解説を充実させました。さらに検査動画を追加して、X 線検査、核医学検査、超音波検査といった運動器関連で実施される検査の目的、手順や看護のポイントが視覚的に理解できるようにしています。

思うように動けない患者を対象に看護するということを、患者のみならず家族を含めた包括的な支援の必要性についても述べています。

超高齢多死社会の中で、重要視されているフレイルやサルコペニアについても取り上げており、運動器疾患との深い関わりが理解できると思います。各疾患の章末には実際の臨床場面とのつながりがみえる設問を掲載し、第 3 部では急性期と回復期から在宅支援までを事例を通して解説することで、より身近に運動器疾患をとらえやすいように工夫しました。運動器看護の一助になることを願うとともに、今後、より充実したものにするため、読者の皆さんからの忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

編者を代表して 山本恵子